

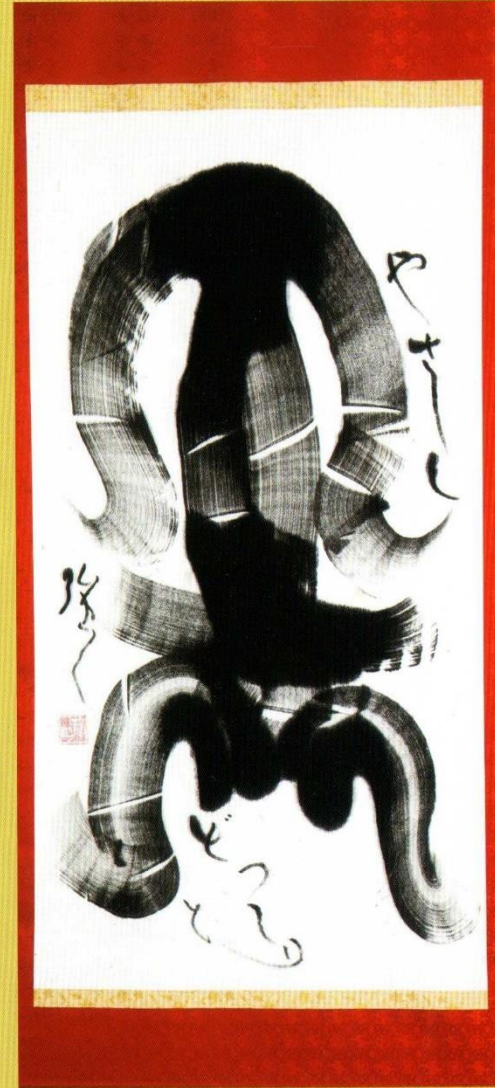
作東の文化

No.41



油絵 妹尾美智子

平成27年10月



作東の文化

No.41

作東文化協会

題 字
真 野 みよ子
表紙写真
題 「羊」
里 見 孤 舟 (明)

表紙説明

題 「羊」(書)

最良の助手であった母を亡くして半年余り。八十八歳の父が、この大きさ(八十九cm×一七〇cm)の、それも縮緬ちりめんに、よくひとりで立ち向かい、踏んばって書いたものと驚きました。

毎年、成人式に千支の作品を使っていただけののを楽しみに書いていましたので、昨年(の十二月半ばか)と思います。それ以降、父は筆を持つことがなくなりました。

やさしいイメージの「羊」に、強くどっしりとと添えたのは、成人となる若い方達へのメッセージと同時に、自分への励みでしたのでしよう。

山 本 千代子

目次

巻頭言

阿部正登(雲魚)先生を送る

内藤善晴……………1

特別寄稿

台湾第六部隊……………

岡田千茶……………3

吉野わが村……………

横山猛……………5

所感寸言

休所のこと……………

山本憲治……………8

姥捨山……………

衣笠隼巳……………9

動物を織り込んだ言葉……………

井上健一……………10

随筆随想

Gran PAの健康(青春)寿命……………

安東公一……………13

空襲の記憶……………

三浦智江子……………15

桜と……………

岩本全子……………16

かけがいのないもの……………

原洋一……………17

歴史紀行

勝田天山弥生墳丘墓から学んだこと……………

春名倫子・春名喜美子……………20

お大師さま……………

長瀬加代子……………22

老いのたわ言……………

出雲街道松並木……………23

吉政実夫……………23

酒田への旅……………

井口祥子……………25

短文芸

俳句

小旅行……………

春名はるを……………28

夏山……………

青山美和子……………28

歳月……………

豊田絢子……………29

盆の月……………

樽井清江……………29

春の草……………

山本靖子……………29

風ありて……………

沖田はるみ……………30

初霜……………

樽井悦子……………30

雲の峰……………

山本登山……………30

新茶……………

井口祥子……………30

もの忘れ……………

杉本幸子……………31

終戦日……………

下山紀子……………31

はげもみじ……………

福嶋多斐子……………31

形代……………

春名静山……………31

カンナ咲く……………

高橋ヤエ子……………32

朝露に光増す……………

森本久子……………32

昭和の贄……………

坂井はつ子……………32

川柳……………

内緒話……………

春名静山……………33

芸……………

山本登……………33

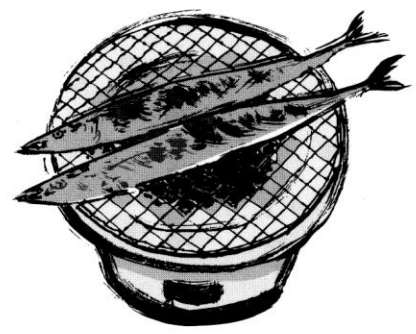
時事……………

山下照夫……………34

喜寿の坂	衣笠	34
八十路	小林	34
ひとり	太田	34
手	山本	35
自画像	原	35
短歌	洋一	35
見える聞こえる	丘野	36
新法怖し	山下	36
曾孫	加藤	37
思ひのままに	新免	37
うつし世に	福嶋	37
咲き誇れ	加藤	37
静かな営み	松本	38
春から夏へ	山下	38
折々に	春名	38
春どこ行つた	杉本	38
豆つ子	小林	39
峡に暮らして	森本	39
今日も生きて	名部	39
折にふれ	原	40
能登香の里	安西	40
夢ひと筋	光井	40
老いの日々に	清田	40

五月雨	安東	41
生きる	大内	41
花よ	井上	41
思ひは浮き草	藤本	41
戦後七十年目	内藤	42
花々	松井	42
亡き夫	原田	42
文芸愛の小径	有元	42
桜の花咲く頃	横山	43
女の孫	宿野	43
峡の夕どき	新免	43
光	豊田	44
自然に任せて	小林	44
遠き日たぐる	加百	44
身の丈	新田	44
ばあばの味	黒石	45
バリ島(クタ)	末宗	45
生き永らへて	船曳	45
卒寿をむかへて	加藤	45
朴の花	角	46
さくら	角	46
間山の「やせ御前」	貞森	46
声の逞し	北村	46

阿部さんを偲んで	黒石	47
思ひ出ださむ	中川	47
花	長澤	47
母	福島	48
わが身のめぐり	入矢	48
初夏の庭	日下	48
約束したのに	浜田	48
亡き子亡き母	春名	49
犬三態	坂井	49
門前の小僧	三浦	49
長寿の秘薬	関内	49
作東文化協会グループ紹介	関内	51
平成26年度 作東文化協会事業報告	関内	55
平成26年度 作東文化協会決算報告	関内	59
作東文化協会会則	関内	60
平成27年度 作東文化協会会員・役員名簿	関内	62
編集後記	関内	73



〔巻頭言〕 阿部正登（雲魚）先生を送る

会長 内藤善晴

平成二十七年七月十四日、阿部正登（雲魚）先生の訃報が、真野みよ子さんからもたらされた。翌十五日にはお通夜、十六日が葬儀とのことで、私はその葬儀に参列させてもらった。

「エヴァホール庭瀬」は初めてだったが、迷うこともなく無事到着できた。式場は、思いの外広い割にはこぢんまりとしており、遺影に向かって右側には、美作市からの献花が寄り添っていた。淡い白雲の青空の下にすくと立ち、遠くを見据えている先生のお姿には、高潔の感が漂っていた。

「南無阿弥陀仏」の念仏が静かに流れる中で、喪主・一恭様の言葉「書家として誠を尽くした幾歳月、最期の瞬間まで自分らしく、日々を誠実に歩み続けた父」のお姿に思いを馳せながら、私は真言宗の輪袈裟を懸けて、浄土真宗の読経に包まれていた。親族に続いて焼香もさせてもらった。やがて萩原市長や大川教育長からの弔電も披露されて、何やら安堵のようなものが過った。

最後に柩のところまで進んでいって、花も手向けさせてもらった。そこには、百四歳の充実した人生を大往生で全うされた、安らかで美しいお顔があった。その右胸元には、遂に刊行されなかったらしい自作の短歌集も行儀よく納められていた。

実際には生前一言もお話できていない私は、帰宅後「作東の文化」を出してきて、阿部先生の特別寄稿を読み返してみた。

一つは、昭和六十二年十一月一日発行の「No.13」——里見明三代会長のもとで全戸配布されたものである。そこには「書に生きて五十八年」と題して、作東町文化協会の発展を願いながら、ひたすら書の道に精進している思いを綴っておられる。

終戦の年に、「長い放浪の旅」より故郷へ帰り、「片田舎で書塾を開いて生きることは言語に絶する苦しい生活の日々であった」こと、またその間「足掛け七年、肺を患い、仰臥、無言、耐乏の日常の中で、書を習い、本を読み、他日に備えての研学一途であった」こと等にも触れられている。

もう一つは、「発刊三十周年記念号」（平成十六年十月十五日発行）の「作東町文化協会発足とその様子」である。

昭和四十二年五月二十七日に設立準備会を開いたこと、若かりし頃、日本の各地で生活する中で、東北の詩人・宮沢賢治氏に会い、「農村を文化的に止揚したい」と熱心に何度も話されたことが導火線となって、「田舎に帰ったら、農村の文化に少しでも力を入れたいと思うようになっていた」こと等が語られ、発会当時から諸活動や苦勞話、創会時からの念願であった文化誌が昭和五十年に発刊されたこと、協力者への惜しみない感謝とともに「農村文化が根を張り、幹を太らせ、美しい花を咲かせる日も近い」現況を喜び、「感謝と希望の念に耐えない」と結んでおられる。

なお、阿部先生は、昭和四十二年七月から初代会長に選任され、昭和五十七年四月に沖田正秀二代会長に引き継ぐまでの十五年間、文化協会の先頭に立ってご努力くださった。

阿部先生のこのような思いは、現在も本当に生かされているだろうか。時にはその原点に立ち返ってみたいものである。

蛇足ながら、わが家の二番目の孫は、書などにはほとんど縁のないような男だが、中学時代に貰ったという「夢」という阿部先生の書を大きな額に入れてもらって、いわゆるお宝として大事にしている。

特別寄稿

台湾第六部隊

岡田 千茶
(川柳作家・岡山市)

昭和十九年十一月三十日、満十九歳の私は江見町役場の書記をしていた。当時、金属供出で集まった蚊帳の吊り手を引き渡す作業を江見駅前の日本通運でしていた。そこへ役場の小母さんから「岡田さん、召集令状が来たよ」と電話があった。「十二月四日岡山工兵隊へ入隊せよ」との教育召集令状だった。

前日、家を出発して岡山に一泊、四日に入管し、八日に岡山駅から汽車で九州大牟田へ、民家に分宿して三日後、三池港から輸送船で朝鮮から大陸沿いに南下、台湾高雄付近に來た時、敵機動部隊接近の報で高雄港へ入港。

翌日昼頃、とんとんとんという正確な汽笛の音がしているの、もう港外へ出ているかと甲板へ上がってみると全く船は動いていなかった。汽笛の故障ということだったが、何とも不思議。

後で噂によると仏印のサイゴンへ向けて出航した十三

は編隊を組んで北へ向かっていたが、今考えると沖繩へ行っていたのだ。

ある日の軍事訓練中、B二九が一機、こちらへ向かって來た。沖繩からの帰りだったのだろう。低空から我々に向けて機銃掃射をしてきた。兵士の顔が見えるくらいの低空だった。慌てて砂糖黍^{きび}へ飛び込み、鉄兜を弾除けにして寝転んだ。機銃弾はばらばらと砂糖黍に当たって音をたてた。それは一瞬のことだったかもしれないが、今でもあの音は耳を離れない。

その頃、蛮人と言われていた山に住む人たちの村を訪れたことがある。家は楼いとも言えぬものだった。食事は土間に鍋を囲んで座り、手掴みで食べていた。台湾人の日本語は訛りがあつたが、彼らは流暢な日本語を話した。

山間の陣地へ物資を搬入し終わると台湾南端の坊寮^{ぼうりょう}へ移動した。坊寮では浜辺に敵の侵入を防ぐため、鉄道のレールを打ち込む作業に開始した。その頃、台風で落下した橋のため、仮橋を架ける作業をした。それが終わった時、慰労をやるうとうとというので、ある朝、浜へ地引網を引きに行った。浜へ着くと何処の誰とも知らぬ人から「戦争は終わった」と聞かされた。そういえば来る途中、坊寮警察署の掲示板に「明日はラジオ放送を聞くように」と書いてあつ

隻のうち目的地へ着いたのはたった四隻。あとは撃沈されたという。私たちは上陸して高雄市内の小学校に宿泊した。

ある日、私は軍隊用語という伝書便を命ぜられて、高雄の軍司令部に行く途中、グラマンの機影を見たので、急いで通りに面した家へ飛び込んだ。その一瞬、空爆で家が傾いたので飛び出した。あの時、もう一秒でも先へ行っていたら直撃を受けていたかもしれない。

その頃のある夜、空襲があつて教会へ焼夷弾が落下した。幸い命に別状はなかった。その後の空襲で輸送船は沈没し、私たちは台湾一九七の六部隊へ編入された。

高雄郊外の万丹という集落に駐屯していた工兵隊に行き、そこで初年兵教育を受けた。

しばらくして山間部へ移動。分隊ごとに藁葦小屋に入り、訓練と陣地構築をした。毎朝、九時頃になると米軍機

たような気がする。

魚は少ししか採れなかったが、昼前に帰ると全員集合を命ぜられた。部隊長から終戦の詔勅が出されたことと訓示があつた。毎朝、朝礼の時、東方遙拝と故郷に拝礼の行事があつた。毎回、故郷に残してきた人たちのことを思っていたが、やれやれこれで国に帰れると安堵した。

その後、元の万丹に戻り、自主的捕虜生活に入った。間もなく何故私を選ばれたのか判らないが、未だ存在していた高雄の憲兵隊行きを命ぜられた。憲兵上等兵として憲兵の腕章をつけ、台南の司令部に伝言便として毎日汽車で行つては一泊して帰ることを繰り返した。一度台北の軍司令部へ軍曹の先輩と二人で行つたことがある。途中、岡山という駅があり懐かしかった。

間もなく元の部隊へ戻つた。

昭和二十一年三月八日、帰還命令が出て、リバティというアメリカの輸送船の大きい船室に造られた蚕棚と言われる場所に四千人詰め込まれ、翌九日、いよいよ高雄港を出航して、三月十五日に大竹港に着き、翌十六日午後一時から復員式が行われた。

散る雪に復員式は終わりたり
その時の一句が手帳に残っている。

汽車は指定されたが、帰心矢の如し、駅に着くと来た列車に飛び乗った。汽車は入口まで満員、人で溢れていた。岡山駅へ着いたのは午後十時半。朝まで汽車がないので駅の地下道で震えながら夜を明かし、一番列車で津山經由で八時頃江見駅へ着いた。

吉野わが村

横山 猛
(歌人)

考えてみれば四日前に私と同じ工兵隊に入管した同級生は後にシベリア送り。私は台湾止まり。運命としか言いようがない。

(川柳第二・六号掲載の文章を補筆)

「英田郡吉野村五名」これが私の生まれた所の地名である。

「英多郡」(当時はこう書いた)の誕生は、和銅六年(七一三年)に美作の国が置かれた時である。

「吉野」という地名については、英田郡誌(大正十二年発行)に「古来、吉野の庄と称し」とあり、明治二十二年に、小ノ谷・山手・豆田・五名・大聖寺・宮原の六か村が合併して「吉野村」となったとある。「吉野」という呼び方についての説明はないが、弘文元年(六七二年)の壬申の乱の際、大海人皇子方―吉野方に味方したからではないかと思っている。山手には、白鳳期の大海寺の遺跡があるので、一層そのように思われる。

「五名」というのは、天文元年(一五三二年) 尼子晴久軍と戦った坂部政次の家来の江見藤兵・小坂田孫六・小林平治・春名平馬・渡辺源内の五勇士が戦死(切腹説あり)したことに由来することである。

さて、我家の二階から眺めると、吉野村をかなり見渡すことができる。なだらかな山並み、それを引き締めるように立つ菩提山、山裾に広がる集落、更には吉野川。八十年余もこの佳景を見ているのである。ああ、あの山では昔を採ったなあ、河原ではよく遊んだなあ、あの瀬では釣りをしたなあと、懐しさが込み上げてくる。

特に、旅をして帰って来ると、やっぱり吉野の村はいいなあと、心が安らいで来て、石川啄木ではないが、ふるさ

との山に向ひて言ふことなしふるさとの山はありがたきかな」と思ってしまうのである。

そこで、私もこの歌にひかれ、「吉野わが村」と題して、次のような歌を詠んでみた。

吉野なるわが村めぐりて雑木の梢うねうるみき
ぬ神の殺言ころしごと

やはらかき空を区切れるあをき山やはやはと
してわが村を成す

国つ神が山に明かりを灯すごと吉野の山につ
つじ咲くなり

朝より人の声して村の田に水張られゆく一つ
また一つ

わが村の朝のあをさよ田の青さ開める山のな
ほあをくして

淀みつつ片明りする吉野川鳩の浮かぶを真中
に抱きて

村山に北風吹き来てもみぢ葉の還りゆくなり
産神の地に

雪曇る空に聳えて老い杉のかけ暗ぐらと暮れ
てゆくなり

降り積る雪の下びに木も家も潜めるごとく身
籠るごとく



日本画 珍珠 純子

所感寸云

感想や批評を文章で表現する

簡単そうで難しい

しかし文章化されることで

新たな感想や批評が生まれる



写真 井口満春

休所のこと

山本憲治

休所の名称と「獅子が口」の土地名称

私の住んでいる住所は、かなり昔から休所(やすみどころ)という名称をつかっている。時々、見知らぬ人が尋ねてきて休所の根拠はないかと聞かれる。どうにか後醍醐天皇が杉坂峠から出雲街道への途中でお休みになされた所ではないかと…思われているらしい。しかし、私の知る限り、そんな根拠はどこにもない。

あえていふならば、私が子供のころ、我が家の木部屋と称する薪小屋があった。その小屋の裏の方に大切に包みか隠してあるのをそうつと見たことがある。中身はたいいてい長ぐつか、地下たびで、誰かが置いて

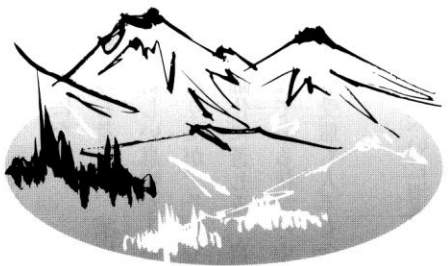
おられたものと思った。

ここまで書くと福山地区の人で姫新線の江見駅を利用しておられた、少しお年を召された方だとわかるかも知れない。即ち、福山地区の人が田淵地区を通り、高原台を通り、ごおろ山(俗名)の東の谷川沿いの坂道を下ると、いちばん近道といったところだろう。休所まで降りると、ひとみ・やれやれと思われたことに違いないと思う。履物をかえられ、江見駅に向かわれたのでは…と思われまます。今、この文を見られて思い当たる方がいたら、一度お話を聞いてみたいと思うことがある。

今ひとつ、「獅子が口」のことだが、

我が家の近くに獅子の頭によく似た岩がある。先日、見に行ったら少し形が崩れたように見えたが、今でもちゃんと鎮座されていた。昔の人が、いろいろ考えて地名を付けたのだと思いを馳せてみた。

他にも面白い地名もありはしないかと思うこの頃である。



昔話に姥捨山というのがある。親孝行の男は働けなくなつた老母をその地方の習慣に従い、地獄谷という捨場に行くが、途中、背負つた老母は木の枝を折り、息子にそれを目じるしに帰れと言う。その後の結末は諸説あり、定かではないが、誰でも耳にした昔話である。

今、地方は高齢化が進み、若者は故郷を捨てる。地方創生という言葉は耳にしても一向に歯止めにはならない。農村であれ、漁村であれ、寒村はそう速くないうちに消滅してしまふだろう。これも時代の趨勢でしかたないと諦めるにしても、一つ納得できないことがある。

今や大都会は、人、物が溢れ、活気に満ちているが、都会の人も同じように年はとる。ぱりぱり働いて社会に貢献して老いてはゆっくり老後を楽しんで過ごす。これは誰もが望む理想でもある。

だが、それから先が問題だ。伴侶が亡くなつたり、痴呆が現れたりして、自分でコントロールできない状態に陥つた時、独立した子どもたちは我が家庭を護るのが精一杯で親の面倒など見る余裕はない。

ならば施設へとなるが、既に飽和状態で空くまで待機してくれとなる。新しい施設を計画しても地価の高騰等の関係で建設は無理。だから、無理

を承知で、地方で面倒を見てくれな
いかという話になる。

働き盛りの若者なら、家族をつれて定住し、新しい息吹が入るなら願つたり叶つたりだが、それでなくても過疎と高齢化に苦しみ、自分の蠅さえ追いかねている状況の中で、それに対応する受皿も人手も余裕はないだろう。

大いに稼ぎ、大いに消費し、それが終つて、手が掛かるようになったから地方へ分散し、面倒をみてくれと、地方を姥捨山の感覚で捉えられては困る。

今、オリンピックの掛声のもと、国の威信をかけて大プロジェクトに取り組んでいるらしいが、その熱気も地方には冷風となつて届くだろう。

今、この原稿を書いている時は夏

の盛り、外では蝉が鳴き、雑草が伸び放題で困つたものだ。だが、雑草があつてこそ田圃の畦も道路の法面も支えられている。

田舎にも雑草に似たパワーがあることを見直してほしいものだ。



動物を織り込んだ言葉

井上 健一

自然の味と風景を織り込んだ「目に青葉 山ホトトギス 初鯉」の句がある。

このように、動物や植物をうまく織り込んだ格言や、ことわざ等がたくさんある。辞書ではうまく解説してあるのだが、なぜこんな格言やことわざになっているのか？納得できないものもあるので、判りやすい格

言と、理解に苦しむ格言を比較してみようと思う。

皮切りにホトトギスの出てくる歌を紹介したので、鳥に関する格言を紹介しよう。

「カラスの行水」は、実際に見たことがある。水につかつたカラスが、アツという間に羽を震わせて飛び去つて行つたのである。なるほど、うまく

なぞらえたなあと感じた。だが、次の格言等は実際に起こる可能性もないので理解しにくい。

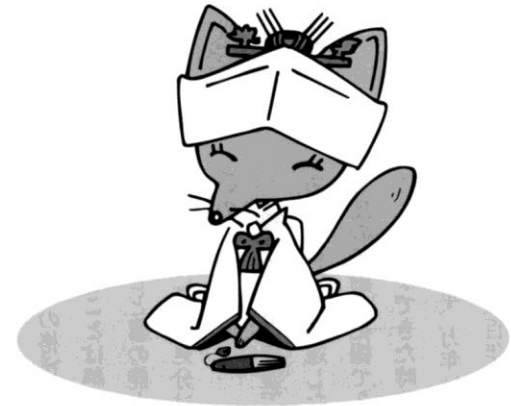
「トンビが鷹を生む」や「能ある鷹は爪を隠す」の格言があるが、トンビが鷹を生むことは絶対にありえないし、トンビと鷹の能力の違いを誰がどのようにして見分けたのか判らないのである。

「鶴は千年亀は万年」と言う格言もある。科学の発達した現代ならある程度の年齢は把握できるが、格言やことわざができた時代には無理な話である。千年、万年は大げさだが、亀の種類には数百年も生きているものもいるので、まったくでたらめとも思えない。

「窮鼠猫を囓む」は、弱い者でも窮地に追い込まれた時には強い者にで

も対抗できるような力を出すことができるという意味があり、実際に起こる可能性もあるので納得もできる。綺麗に晴れた日に突然降り出すこともあるが、この現象を現す言葉「狐の嫁入り」と言っている。狐は昔から魔性の動物として人を誑かすとも言われているので、何となく判るような気もするが、なぜ嫁入りなのか判らない。

今回紹介した動物を織り込んだ言葉はほんの一部でしたが、殆どの動物や植物が格言やことわざになり、私たちの生活に溶け込んでいます。先祖からの贈り物を失わないようにしたいですね。



随筆随想

おりにふれて

感じたことや

見聞・体験を

なにくれとなく

書き綴る

思いのままに



盆栽 末宗重信

Gran PAの健康（青春）寿命

安東公一

小生、Light Begin for 75:「七十五歳が私の再スタートの歳」として生きている。

七十一歳の時、妻に突然先立たれ、生きる気力もなく、二年位、布団の中の生活だった。永六輔さんが、「配偶者が先立つと、女性は二、三年すると活き活きして長生きするが、男は三年位で後追いつく」と言っていたが、私もその通りになりかけていたし、それでいいと思っていた。そんな時、娘から電話があり、「お父さん、布団から出て生活して」生きてくれなければ私は寂しい」と言い、息子は毎日午後六時三十分に電話してきて「生きてるか?」と言い、この優しい

二人のためにも生きるべきだと思いうようになり…。

ある朝、思い切つてベットから飛び起き、アトリエに入り、五十号のキヤンパスに向かい、「愛」をテーマに、妻は大きな二段の眼、男は真っ黒な胴体の馬、そして大きな耳、そして絡み合う四本の手、そして愛犬ジミーのキョトンとした姿、バックは真っ赤にした。この絵をアトリエで見た友人たちは、「ピカソだ」とか「作東のピカソ」とかいいた。人から見れば、漫画チックな絵なので、入選するとは思わなかったが、私としては真面目に描いた絵なので、県展に出品したら入選した。

県立美術館の会場の私の絵の前で偶然に会った審査員の先生が、「安東さん、こんな力強い絵が描けるなら、もう大丈夫」と言ってくれた。

その時から、「Your Days?」と聞かれたら、喜びも哀しみもあるがまま行きたい、そして「今、いのちあるはありがたい」と答えたい。そして、どうせ生きるなら、ただ生きるなら意味がない、これからは日々、手応えを感じながら生きよう。

そして、平均寿命が来ているのに、おこがましいが、生きるなら心は心爽やか二十六歳の青春時代でありたいと思った。そして衣・食・住を個人的で楽しくオシャレして、美味しく、生きている。

「住」は七十三歳の時、水害で十三部屋、床上浸水し、家財道具一切浸か

る悲劇があり、途方にくれたが、そのため畳をフローリングにして自分好みに改装したので、まずはクリアーした。

衣・食・住の基本はできたが、私には、第一に油絵、第二にガーデニング、第三に海外旅行という趣味がある。それでも、無性に寂しいことがある。そんな時、Go Beyond The Pain「行こう 苦しみの 向こう側へ」と言うように趣味は何も忘れさせてくれる。いつもこれで元気をもらっている。年々体力は衰えるが、心の青春を求めて、心豊かに未来に向かい、急ぐことなく、穏やかに生きていこうと思っている。

愛が深ければ深いほど、配偶者に先立たれた一人暮らしは厳しいことも多いと思いますが、何か、衣・食・

住、心からのめりこめる趣味をもって、青春を取り戻して生きてください。私は、柔らかな頭で、自由な発想のできる人が好きです。そんな人は是非遊びに来てください。楽しく人生をかたりあいましょう。お気軽にお越しください。楽しみにお待ちしております。

合掌



油絵 安東公一

空襲の記憶

三浦 智江子

私は昭和二十年三月、満四歳を前にして、神戸で空襲に遇った。街中が火の海になるあの夜の様子を、今もありありと思い出す。

戦地では、二番目の叔父が戦死した。細い顎の若い軍服姿の遺影はずっと仏壇に在った。

一番上の叔父は英語が話せたために、スパイ活動をしていたと疑われて、ボルネオに長く抑留され、帰国が遅くなった。帰って来る日、「おじちゃんに何と挨拶すればいいの」と母に尋ねたことを憶えている。

今年はその空襲から七十年目、奇しくも昔の記憶が短歌になって、天から降りて来た。その、幼く小さな戦

争体験を寄稿してみたいと思う。子や孫たちが再び戦いに駆り出されることのない平和な暮らしが続くことを祈りつつ。

母の背にて燃ゆる夜空の明るさを
仰ぎし記憶よ神戸大空襲の
砂袋リレーを真似して遊びぬき

「空襲警報発令」と言ひて
玄関に砂袋積みてそなへしを

焼夷弾の雨降りて術もなし
B二九の襲ひ来る音耳にのこり

飛行機の音ながく怖かりき
予め送りぬし家具むづかにて

暮らす幾月大伯母の家
大叔母の家の二階はほのぐらく
達磨の掛軸のぞき見てぬき

小さきゆゑ助かりて今ここに在る

七寸五段のせともの雛

井戸水は時折枯れて迎へ水を

注ぎてがしがしポンプを押しき

凍て畑の麦踏みをしき足先が

冷ゆる冬の日陽ざし明るく

水ぎはに寄りくる夕べの川蟻を

とりて遊びし備中川よ

真みどりの広き川原に草を食む

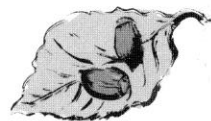
黒牛がぬき二頭三頭

疎開子われ友だちの輪に入りがたく

ひとり遊びの山川ありし

栗原での私を知る山田君

近所だつたと同窓会で話す



桜と…

岩本 全子

今年の桜の花は見事でした。

主人が元気な頃、仕事帰りに立派に咲いているので、小枝をいただいて自分でさし木したものです。ぐんぐん成長して大木になった時、「ズー」ときれいに咲くんだよ！」と木の下で我が子に言うように言っていたのを覚えています。それが昨日のように思えてなりません。主人が逝ってもう六年がたち、遠い昔のことのようにさえ感じます。

コツコツと小まめに花の苗を作ったり、さし木をして果物の種類も増えてきましたね。家の裏は段々畑なので、みかん、桃、びわ、柿、ゆず、ぶどうが大きくなっていますが、私

が消毒を上手にしないので、数が少なくなってきましたね。

そして七月十三日から月見草の花が夕方パツパツと音をたてて咲き始めました。今年はまだで中央高く大きな花をつけて私の大好きなポーズをとっています。まるで頂天が主人の下に私たちがいて、天から守っているようです！そのポーズに毎日私の心は癒やされていることでしょう！よろしくね！と答えています。

あれから一ヶ月、毎日たくさんの花が咲いて、そして種をつけています。また来年に備えて立派な種子がつかしました。稲田もすくすく成長して夕日に映えて幻想的にさえ感じま

す。本当に自然はいいなあ！私の心を癒やしてくれます。

宵の明星がやさしく輝きはじめました。この時間が私は大好きです。朝からの一日をふりかえって、反省もし、自分の力を大いにたたえる大変大切な時間です。足の痛さに耐えて今日も暮れてゆくのかと思うと感無量で胸がいっぱいになります。

身体に充分気をつけてまだまだ頑張っていけたらと思っています。できたら世界一の夕日の美しいハワイに行ってみたいです。

また明日！また明日ね！よい日でありませうにと祈りつつ。



かけがいのないもの

原 洋 一

初夏の清々しい陽射しの中、空地の片隅に折りたたみ椅子を置いて、絵を描き始めます。ふと足元を見ると、雑草の間に名も知らぬ小さな黄色い花が咲いています。こんな所にも命を咲かせる自然があり、その自然に触れる喜びがふつふつと湧いてきます。こうして戸外で、その場の空気と一体になって無心に絵を描いている時ほど楽しいことはありません。七年前、絵の好きな友人に誘われて渋々ついて行ったのが始まりでした。それからどうしたことかだんだんと虜になり、今では妻とスケッチ旅行をすることが一番の楽しみです。水彩画は、手軽で道具もシンプル

でありながら、幅広い表現が可能です。特に透明水彩の場合は、彫刻に例えられる通り、やり直し、塗り直しがきかない難しさも魅力です。水を使い、紙の白さを生かしながら描いてゆく、透明感のある水彩画は奥が深いと言えます。

技術的なことは別としても、なぜこんなにも水彩画に魅了されるのかを考える時があります。そして、絵を描くことは、かけがえないものを忘れないようにすることだと気付かされます。かけがえないもの。つまり自分では作れないものや自分を作ったもの、自分を支えてくれるものことです。

例えばその一つが故郷です。故郷に似た風景を見ると絵に描きたくなります。自分が慣れ親しんだ自然や風景はずっと残っていて欲しいものです。しかし、自分自身を含めて、自然や街も永遠ではありません。そんな中で人が力強く生きている現実を目にすると、自分の本当の故郷はもっと深い所にあるということ、つまり、未来という見えないものを信じて生きる心の中にあるものと言えるのではないかと思えてくるのです。スケッチを通じて風景そのものを描いているのではなく、自分が今ここにいること、かけがえのなさを描いているのかもしれない。

見知らぬ土地での人や自然との出会いは、新鮮な気持ちにしてくれます。慌ただしく時が流れ、色々なもの

が変わってゆく日々、その中で垣間見る非日常の魅力です。

遠くに行かなくても、絵は下手でも、かけがえないものを見つけることができます。雲一つない、抜けるような青空、緑いっぱい命溢れる木々、誰に見せるでもなく咲いている花たち。普段見逃しているものは実にたくさんあります。

さて次はどこに行こうか。どんな出会いがあるのか。わくわくしている近頃です。



歴史紀行

大きなできごと

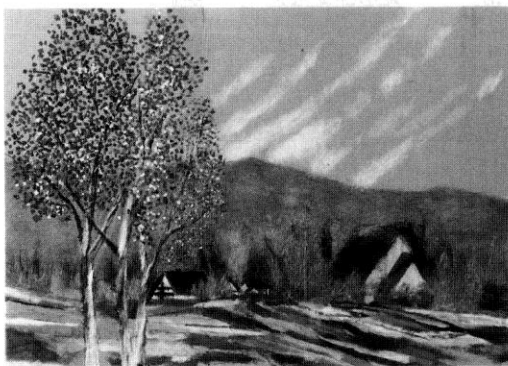
些細な歩み

みな

人間の歴史

かたりべとなつて

伝えよう



ちぎり絵 平田 三代子

勝田天山弥生墳丘墓から学んだこと 春名倫子・春名喜美子

「墳丘墓」といったら皆さんは何を思い浮かべるでしょうか。「古墳」それとも「磐座」でしょうか。私たちが特に古代史に関心を持っていたわけではありません。遠い昔に「月の輪古墳」「榎築遺跡」の発掘現場を目のあたりにしたことが記憶の片すみに残り、火のように生き続けていたのでしょう。平成の時代に入ってから、少し生活にも時間的にもゆとりができ、気持ちの赴くままに地域の文化活動に参加し、古今集やら万葉集の研修にと、古い時代のありようを断片的ながらも学習し、関心を持ち続けてきました。

平成二十一年、突如、私たちの村に

ゴミ処理場の中継地点を設けるような話が持ちあがり、地域住民は困惑し、それぞれの思惑もあり、十分な研修もしないまま紆余曲折の末、ゴミ処理場建設へと方向転換し、焼却場建設計画が市のイニシアチブで進められていきました。

建設のための測量の途中で遺跡らしいものがあると判り、平成二十三年一月から三月まで市教委の学芸員主導のもと、地域からも数名の協力者を募り発掘が進められた。調査を進めていくなかで墳丘の形が円ではなく方形であること、掘り出した土器から判断して三世紀初期の但馬系のものであるとすれば古墳時

代の一つ前の時代である弥生時代の「墳丘墓」である。今から一七〇〇年から一八〇〇年位前のものであり、県内でも珍しい遺跡ということである。この形で見地でも保存する計画であると、平成二十三年三月二十八日の現地説明会に於いて説明がなされた。この会には美作の各地から関心のある人たちが多数参加されていた。弥生時代の始まりは、旧石器時代・縄文時代に続く時代で紀元前三〇〇年頃から終わりは三〇〇年頃まで、この間の六〇〇年というのがこれまでの弥生時代の通説です。

この時代大陸から伝わった稲作は、北九州で始まり、西日本から東日本へと伝わっていったと考えられます。稲作がさかんになるにつれ、人々は土地を守れ、食料を守れと団結し、り

ーダーが生まれ、国が生まれてきま
す。その村々のリーダー(首長)を葬
ったのが墳丘墓で、弥生時代後期に
なるとさかんに築造され、さまざま
な点で古墳時代の前方後円墳に継承
される諸要素を含んでいるといわれ
ています。

ところで、遺跡説明会当時の呼称
は「杉原古墳」、当時は暫定的な呼称
だったかも知れないが、いつの間に
やら「杉原弥生墳丘墓」に、それが更
に三転して「河内・杉原弥生墳丘墓」
へと、地元には何の説明もなま
一方的に変更されていったのです。

今の時代、地元の意見も尋ねて納得
のいく変更をと、市当局のなされよ
うに不信感をもったものです。

美作の教育委員会の方に変更の理
由を尋ねたところ、「固定資産税台帳

それにつながる美野盆地の数基の古
墳群に思いを馳せ、墳丘を築いた「首
長」の人となりや、村のくらし、文化
などに思いをいたしています。

「勝田天山弥生墳丘墓」から美作地
域の古代が見える。出雲、伯耆、因幡、
但馬、播磨、丹後、吉備との関係も色
濃く窺え、これからの学習の縮口に
なりそうです。

美作クリーンセンターの学習と共

お大師さま

長瀬 加代子

私が住む地区には、三ヶ所に小さ
な大師堂が建っている。集落の真中
を東西にのびる出雲街道沿いに二ヶ
所、あと一ヶ所は、集落南側の山裾の
竹やぶの蔭。

の線引き内の広さで変更に至った」
という返答だったので、約三世紀頃
の王者の墓が現在の固定資産台帳面
積の多少で決定されるのはいかがな
ものかと思いました。市の教育長に
も平成二十七年二月五日、墳丘墓に
ついて、また諸種の資料を持参し、申
し入れをしたのですが、回答はやは
り前述の通りで進展はみられません
でした。たまたま二月十日、萩原市長
を囲んでの懇談会が催され、疑問に
思っていたことを申し述べますと、
命名権はどこにあるのか調べて回答
しますということでした。

結局、これからも埋蔵文化財など
の発掘もあるだろうから、基準にな
るものが必要ということ、平成二
十七年二月二十六日付で「美作市教
育委員会告示第三号、美作市に於い

に墳丘にも関心を持ち、古代の歴史
探検に一石を投じられるよう、皆様
奮って探検を！

参 考

- ・吉備の古墳(上・下) 吉備人出版
- ・古墳に秘められた古代史の謎 宝島社
- ・標準日本史年表 吉川弘文館
- ・歴史読本 古代王権と古墳の謎 Kadokawa

て発見された遺物遺構及び遺跡等埋
蔵文化財の名称付与に関する要綱」
が発令される運びとなり、萩原市長
から「墳丘のある山の名前は？」と区
長に対してお尋ねがありました。「天山^{あめさま}」の
名が浮上してきました。私たちが幼
い頃、雑草とりや山遊びの場として
親しんできた「天山」です。六月十五
日の定例議会でも墳丘の命名につい
てN議員より上程され、審議の末、満
場一致で「勝田天山弥生墳丘墓」と承
認されました。私たちも傍聴席でそ
の様子を拝見し、たとえ小さなこと
であっても、市民の声を市当局に届
けるよう、勇気をもって行動すべき
だと思いました。

今、改めて、発掘当時の様子を思い
浮べながら墳丘の丘に立っています。
河内部落、大畑・矢田部落、そして、

続く。六十二番の像には、第六十二番
札所、弘法大師、天保二年卯月三月二
十一日、施主 兵右工門の文字が見
える。

四国霊場八十八ヶ所巡礼は、江戸
時代から盛んに行われるようになり、
しかし、四国は遠国のため、誰もが行
けない地では、霊場に模して札所を
開いて巡礼していたという。三ヶ所
の大師堂は、札所だったのだろう。

子どもの頃、毎年四月、大師堂で行
事があり、参拝者で賑わった。お接待
があったような記憶があるが、定か
でない。今は、お大師様に参る人はい
なくなり、時折り、出雲街道を歩くグ
ループが、大師堂に立ち寄っている
のを見かけるくらいだ。

Sさんは、散歩の途中、いつも大師
堂前の道で膝を折り、手を合わせて

いた。前日まで変わりはなかったのに、その日の朝、Sさんは静かに眠るように逝った。まだ七十歳で、早過ぎる死だが、Sさんがお大師様に合掌していたのを知る人は、「事故に遭うとか、苦しい病でなく、穏やかな最期は、お大師様の御蔭よ」と、いった。

の草刈を続けていた。その大師堂が老朽化し、六十二番、六十三番札所が新しく建て替えられた（平成二十一年）。費用は、地区の有志が寄進した。建て替えを提案し、寄進を集め、業者との交渉などに尽力したのは、当時区長をしていた小林正樹氏である。

では分らない。
先ずは、地域の歴史に詳しい小林正樹さんに訊ねてみようと思ひ、それが延び延びになっていくうち、今年五月に小林さんが他界された。早く話を訊いておけばよかつたと悔やまれる。

小林さんは、区長在任中、そして作東文化協会でも多くの業績を残された。その活動に敬意を表し、つつしんでご冥福を祈ります。

老いのたわ言

出雲街道松並木

吉政実夫

戦国時代も終わり徳川幕府によって国が平定され、美作津山藩においても殿様が森様に決まりました。殿様は道路整備に力を入れ、官道と地

区道を区別されて、官道には国境に関所が置かれ、一里塚を設け、付近に松と榎が植えられました。それが長年の風雪にも耐え、宿場

町であった土居に三百有余年過ぎても生き残り、一見盆栽のようにもあり小山のようにもあり、畑や田んぼに大きく根を張り、見事なものでした。
それが昭和十五、十六年頃に松枯病によって枯れてしまい、残念でした。

しかし、不思議にも一本だけ昔の東総門付近に生き残り、手入れをしていたが、所有者が変わり、そのどきどきにまぎれて心無い者によって切り倒され、三百有余年の歴史ある証をなくしてしまいました。

爺さまが出しゃばることでもありませんが、町には文化財保護委員が居られます。法的に力があればこのようなことにはならなかつたと思います。この松と旧土居本陣の通用門を失ったことは本当に残念なことです。多くの松は、決して大ボラではなく大巨木でありましたが、建材や畝木にならずに松根油の原料になってしまったのです。

明治維新のちよつと前に勅使がお通りになるといふことで、関所役人、村役人や村人が多数土下座してお迎

えていたところ、駕籠ではなく馬で、衣冠束帯で入場していたところ、勅使の冠に松の小枝が引つ掛かり、勅使は立腹、腰の太刀を引き抜いて枝を切り落とし、関所役人、村役人が呼び出され、大目玉で一件落着と言うことになりましたが、その松は、勅使松と言われ、神格化されて近づきにくい存在の松になりました。
爺さまの最後のたわ言と笑いながら読んでください。

出雲街道松並木

勅使松（一、五トメ）

・東総門付近、本陣安東家の門跡
門前松（三トメ）

・昭和初期の災害で倒伏 西総門前
ガラント松（四トメ）
・雷により中は空洞になっていた。

昭和十六、十七年頃松枯れ
ムクの木（三トメ）
・門尻橋、県道工事により切り倒された。

一里塚の松（一、五トメ）
・昭和十五年頃松枯れ
塚の元の松（二、五トメ）
・昭和十五年頃松枯れ
枯れ木の一本松（三トメ）
・昭和初期に枯れる。
（土地の名が枯れ木）
えぼし岩、栗田の松

（二、五トメ、一トメ、三トメの三本）
・昭和十六年頃松枯れ。昼でも暗く、刑場跡でもあった。名号石もあり、夜はお化けの名所
岡理頭太さん宅前の松
・手入れもしてあり、昭和四十年頃まで存木

酒田への旅

井口祥子

去る七月一日、二日、三日に二泊三日で、山形県酒田市へ旅をした。遠い酒田へは、新幹線の乗り継ぎでは大変な時間がかかるので飛行機の乗り継ぎの旅となった。

この旅行は大分の坂さん、京都の大原さんといっしょに酒田市の本田さんと会うためである。私たち四人は平成元年に、つくばの中央研修で一ヶ月共に学んだ友達である。そして中央研修を終える日、お互いに県の特産物を送り合うことを約束して別れ、二十七年間送り続けたのである。酒田市の本田さんからは、毎年サクラランボが届き、六月の楽しみの一つとなっていた。

その本田さんから、数回にわたり案内の手紙をいただき、坂さんは大分空港、大原さんは伊丹空港、私は岡山空港で搭乗し、羽田空港で三人が合流して庄内空港へ行くこととなった。七月一日、予定通り羽田空港で三人が出会い、四時過ぎに庄内空港に到着することができた。庄内空港に降り立つと笑顔の本田さんが待っていてくれ、タクシーで宿のかんぽ坂田へ向かった。

タクシーで宿へ向かう途中、一番に目についたのは沿道に植えてある松並木だった。相当年数が経ち、大きな松が一樣に傾いているので、タクシーの運転手さんに聞くと、

「酒田は、海からの風が強く、飛砂を防ぐために鳥海山の麓からずっと松が植えられた。」と言う。

かんぽ坂田に着くと想像していたものより大きなホテルで、温泉でもあるというので、いい所へ来たなあと思った。全国にあるかんぽの宿がだんだん^{すた}廃れていく中で、賑わっているこの宿の良さが二泊してみても分かった。五階の広い部屋で、本田さんの心づくし、庄内メロンをいただきながら積もる話が夜更けまで続いた。

翌朝は案内のタクシーに乗せてもらい、少し足の悪い坂さんを気遣いながら、酒田の名所を見て回った。一番心に残った所は、山居倉庫^{さんきょくら}である。山居倉庫は、明治に建てられた米穀取引所の付属倉庫で、最上川の川べ

りにあるため、江戸、京都などへ千石船がおいしい庄内米を運んだそうである。西側に植えられたけやき並木は、西日を防ぐもので、今もお米の保管倉庫として利用され、物産館では酒田の特産物が売られていた。

二泊三日の旅はあっという間に過ぎ、七月三日、庄内空港での別れはつらく、空港の三階のデッキで手を振る本田さんの姿が豆粒になるまで飛行機の窓からじっと見つめていた。



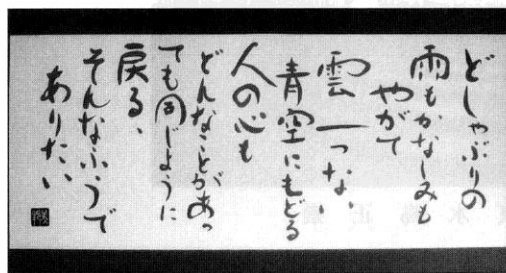
山居倉庫のけやき並木



写真 水島正崇

短文芸

生きていく
あかしとしての
自分の思いを
自分の言葉で
表現する
その表現が
万人の魂を
ゆり動かす
短文芸の力
伝統文化の力



書道 綱島邦子

俳句



生花 樽井清甫

小旅行

春名はるを

論語朗誦閑谷の春浅し
菜の花や見え隠れして伊予緋
酒蔵の煙突高し合歡の花
慎ましく咲く播磨路の野菊かな
行く秋の鳴門の渦に巻かれたや

夏山

青山美和子

山寺の苔むす墓標手を合わせ
里若葉優しく揺れる昼下がり
雨上がりがこいっばいの胡瓜かな
かなかなと津波の如く迫り来る
夏山にくっきり白しベルピール

歳月

豊田 絢子

岩伝ふ一筋の水凍てゆるむ
春陰や響き隠らふ寺の鐘
ゆくりなく雲よりいづる盆の月
穏やかな波の音する石路の花
歳月にただ立ち尽くす枯木立

春の草

山本 靖子

介護士の手を引く道に春の草
瀬音聞き奥津の若葉時忘れ
遊ぶ子の足元飾るいぬふぐり
昼下り木陰に座せば初夏の風
日暮時寺の鐘聞く冬座敷

盆の月

樽井 清江

老梅の生き様見える幹の苔
色添えて呼吸うながす青田風
思い出のつまる故郷盆の月
一服の湯茶のもてなし時雨宿
湧きのぼる入道雲や空の旅

風ありて

冲田 はるみ

宮道へ風に乗り来るさくらかな
朝風や大茅の輪今据ゑらるる
穂田に風神輿の供の旗白し
夜の風の運ぶや子等の亥の子唄
左義長の煙舞ひ這ふ境内の風

雲の峰

山本 登山

故郷は遠く懐かし雲の峰
引き鴨のなごりの羽の浮いており
開店ののれん新たに立葵
流灯の消えて漸く歩を返し
カリブネの連れ一筋に海渡る

初霜

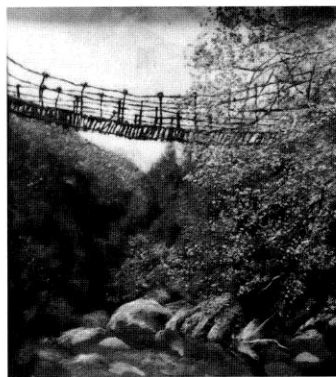
樽井 悦子

雪明り猫の足跡路地の中
初霜を背にうけながら急ぐ駅
鏡餅われて今年も日和かな
山茶花の垣根越しにて笑い声
夏のれん今年も吊るし足さする

新茶

井口 祥子

ふぐりの根しつかと大地ふみしめて
新樹燃え杖つく老婆畑の中
屈みこみ母なせしまま新茶採もみ
ゴム長を洗みて終わる早苗植え
硬き土鋤打つそばに梅の花



ちぎり絵 井口 きよ子

もの忘れ

杉本幸子(土居)

そぞろ寒む日々もの忘れ多くなり
満開の桜散らせし風雨かな
五月雨や窓に張りつく雨蛙
父母の墓笹の葉ずれのさやさやと
青嵐青葉をゆすり吹き抜けり

はぜもみじ

福嶋多斐子

初明かり孫とあじはふ抹茶かな
淡雪や笥の水の細き音
麦秋と云へなくなりて水張らる
もくせいの香にうずもれて布団干す
人逝きて一角に燃ゆはぜもみじ

終戦日

下山紀子

空ばかり見ており八月十五日
終戦日かの日も今日も蟬時雨
大向日葵戦終わりし日の記憶
鯛雲戦なき世の空仰ぐ
いつまでもいついつまでも終戦日

形代

春名静山

病棟の朝餉の膳の祝い箸
上棟の五色の幣ひなや風薫る
アネモネや片言で来る三輪車
華はなやぎて一と日の命大芙蓉
形代に九十歳と書く齢よ

カンナ咲く

高橋ヤエ子

少年の恋の初まりカンナ咲く
秋立つや磨き上げたる風呂の蓋
日没の極みてゐたり田草取り
秋桜揺れて優しい人に合ふ
緑陰や将棋の駒の縦横に

昭和の贄に

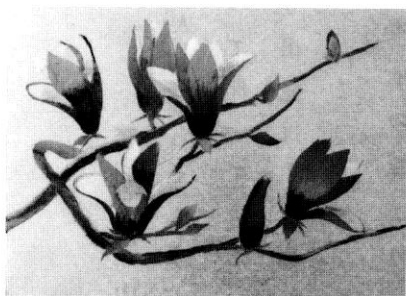
坂井はつ子

鶴を折るだけで良いのか原爆忌
八月や遺児とし生きし七十年
梅雨寒や昭和の贄の尖り墓

朝露に光増す

森本久子

朝露に光が増して消えてゆく
稲田にて蛙よるこびとびはねる
夜光虫新樹に迫り光あり
時鳥空に声して遠くとび
鳩二羽稲田の中に姿消す



ちぎり絵 青山美和子

川柳

内緒話

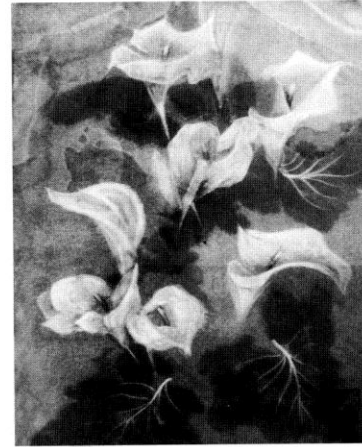
春名静山

土壇場で赤の他人と言って逃げ
内緒話壁は黙って聞いている
終戦日ゼロより出発民主主義
あの頃は兵隊ごっこ少年期
入浴の世話介護士の賑かに

芸

山本 登

喜怒哀楽 おもて 面一つで見せる芸
病みついて心の弱さ知らされる
生き残った同級生に指を折り
パズル一つ解いて大息一つつき
まだ死ねぬ余命の綱を引き伸す



水墨画 谷口 翠

時事

山下照夫

汚染せど再稼動待つ人の有り
汚染水増えてタンクは大繁盛
亡国の原発何故に再稼動
千兆の赤字も懲りずまだ配り
小さくとも巨人に見える宮間かな

八十路

小林醇子

庭のもの活けて窓辺の風涼し
朝顔やおもいおもいに花の色
枕辺に句集散らかし秋の夜
若い気でいても背中は丸くなる
そこはかと疲れくる夜や我八十路

喜寿の坂

衣笠隼巳

ローギアに落して登る喜寿の坂
立つ時も座る時にもヨッコラショ
我武者羅に走り気付けばもう日暮れ
節くれの手が物語る八十年
拍手にもはやく終れという合図

ひとり

太田智子

遠き日をつまみに子らと飲むビール
不自由させた子供にもらうお小遣い
後継にバトンを渡す荷を背負い
今日の月も私もひとり一会の夜
小走りの人生だった夕陽落つ

手

山本昌子

悲しいと生命線を辿るくせ
ほほ打ってしまつてからの手の痛み
逢えば又ドラマを作る手の温み
まだ愛のほてりが残る平手打ち
触れた手の温もりだけは信じたい

自画像

原洋一

拾うては拾うては選る夢の数
馬鹿です無えものねだりばかりして
心模様刻むリズムの五七五
わたくしを解くふる里山笑う
秋の絵は私を映す水彩画

短歌



生花 末宗悦甫

見える聞こえる

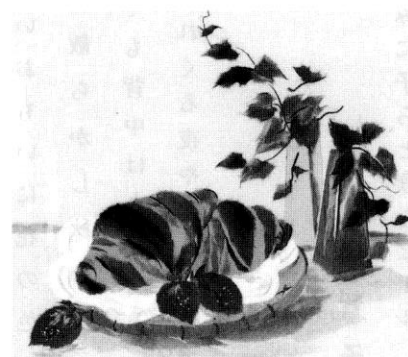
丘野道子

あの辺りにゆきたいなあと風を待ち意に適ふ時に
枝を離るる花
友の吹くフルートの銀銀音色雪野原の中の猫柳の
銀
病ゆゑの一人暮しの長ければ他人には聞こえぬ声
が聞こえる

新法怖し

山下照夫

子や孫に戦争の道歩ますや他人事ならず戦慄覚ゆ
幼児とて歴然分かる第九条踏み躪りたる新法怖し
貧しきとて人殺しせぬ国であれ国を治むる政治家
いかにや



ちぎり絵 山本津多江

曾孫

加藤 幸子

己が意地通さんとのけぞり泣きわめく男曾孫の初
誕生日
ばあちゃんが菌を食べたよと告げに行く曾孫は我
の菌磨くを見て
曾孫らがあやつる画面その仕草見てみて時の経つ
を忘るる

思ひのままに

新免 初子

幾つもの涙が光るさまに見ゆ梅雨の朝のあぢさゐ
の花
見渡せる早苗を揺らして渡る風田の面に映る山も
ゆらして
己が意志に身を巻き締めてや玉キヤベツ猛暑の中
に凜と生きをり

うつし世に

福嶋 多斐子

うつし世に長らえて今はらからの残せし言の葉あ
たたかきかな
終日を味噌を炊きぬし大釜をそのままに置く夫亡
き今も
麦笛も草笛もなく夕焼けて舗装の道を車行き交ふ

咲き誇れ

加藤 芳英

時々ごうに想ひ出しぬし「空」の意は「多くの縁えんの和
合の意」とぞ
燦々さんさんの「バレンタイン」の利用法「市民本位」に
咲き誇らさむ
我が息をいき一、二、三と吐きし後、酸素と「元氣」
を「魂」に注ぐべし

静かな営み

松本 哲夫

農作業も老いの所為かやゆつくりと「ミニトラ起
耕」よ苦しくなりて
毎夕の五時の時報のメロデイに今日の作業も無事
に終りぬ
植ゑ終へし田に鷺三羽が降りて来て餌えを探しをり
悠々として

折々に

春名 静山

過疎の里子供の姿は稀となり風の上らぬ正月の空
ダイケアの広場に挿せる笹百合の香り漂う女の職
場
語ことえば知らぬお人もしみじみと身近な人となりて
親しむ

春から夏へ

山下 三代子

春雨を待つかの如く沈丁花庭の片隅で密やかに咲
く
池水の落ち来て我家も田植えをす「秋田小町」を
機械で植ゑて
卯の花は純白にして清楚なり山裾に咲きて初夏を
告げつつ

春どこ行つた

杉本 幸子(土居)

春きたと思えば冬に逆もどりそして真夏日春どこ
行つた
限界と足を引きずり登る坂上って行かねば墓には
行けぬ
梅雨寒や電話もかからず人も来ず何事もなく今日
も暮れゆく

豆っ子

小林 美和子

降りきたる雨に潤う畑には播きいし大豆に光る二葉よ
柵こえて飛び込む鹿に去年こぞよりも長き杭うち畑を
囲む

若き頃夫購いし花菖蒲み色の花の咲きいていまでも

峡に暮らして

森本 久子

風もなき三十四度の猛暑日にわが家のつばめ巢立ち
ちゆきたり

吟詠のテープを耳に押し車足弱くつひに野道に居
すわる

乾からに色鮮やかに紅葉の急に暮れゆく星は光れ
ど

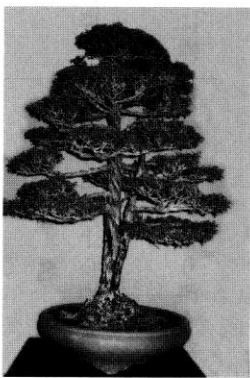
今日も生きて

名部 みどり

天空のま白き雲は秋なるに未だ刈る人も見えず横
仙の稲田

見るほどにするりと動く気配して足がすぐみぬ書
道展の字に

まろなるまなこに小さき口とちて保安帽の乙女
に国道明るし



盆栽 板垣 勝

折にふれ

原 幸子

孵化したるばかりの蟻螂を指先に大きくなれよと
言ひて撫でやる

鶴山の博覧会にお化け屋敷で泣いて困らせき幼日
の我

玉葱を吊して見上ぐる五拾連今日の喜び一年の労

能登香の里

安西 苑

草萌ゆる緑の原に風立てば何が見ゆるか人独り立
つ

粟井川風吹く度に波立てて果なき川は何処へ流る
る

草を取る我に負けじと根をはりて草は緑を敷きて
ゆくなり

夢ひと筋

光井 房子

職を辞し農ひと筋に生きぬきて齢を重ねて卒寿近
き夫

かばんでないランドセルだよと言ひわが孫のラン
ドセル姿に夢をゑがくも

習ひたる校歌をうたふ一年生の歌声ひろがりて耳
底に残るも

老いの日々に

清田 三智子

立春も間近といへども牡丹雪舞ひてゐるかやいと
誇らしげに

外孫もやうやくにして嫁ぎゆき娘もほつとひと安
心の笑み

進歩なく恥づかしけれども唯一なる楽しみなれば
歌詠みゆかむ

五月雨

安東松代

多かりしかはた足らざりしかわが言葉枕辺に聞く
は五月雨の音
朝あさに見廻る野菜に声かけて今朝は五つのカボ
チヤに受粉す
花をつけ実をつけ命をつなぐ種雑煮に用ひる水菜
の種を蒔く

花よ

井上さかゑ

列なし咲くクロツカス花は吹く風に色香のせつつ
春を呼びつつ
紅色に吊り鐘のごとき花つけて馬酔木の房は四温
の日の中
今朝の花明日咲く花よと見てをれば浮世はなれし
心に出合ふ

生きる

大内佐智

八十路来て模索続いた青春も今は終りよ如何に生
きるか
現世に生きゐる我に何問ふや御仏の眼指しらんら
んと輝く
菜の花に春を感じて老い力にまだ頑張らむと畑へ
向ふ

思ひは浮き草

藤本伸子

若き嫁子も母も置き逝きたれば遺影も曇り手を握
りしむ
父方にも母方にもあり不幸の便り心もなえて仏具
を磨く
叔母の肩小さく震ふに手を握り九十の背を静かに
労はる

戦後七十年目

内藤慶子

戦後から七十年目傷跡の体験話に耳を傾く
戦後から七十年の今原爆に関心を持ちて平和呆け
せず
広島の平和記念の式典に参列せしは六十年前も前

亡き夫

原田順子

亡き夫と夜桜を見に行きたるは二十数年の過去と
なりけり
梅咲けば夫思ひ出し椿咲けば義母の植ゑしをしみ
じみ思ふ
傘寿なる写真を飾れば夫は医師の威厳を保つか車
椅子なれど

花々

松井洋子

散りさかる桜の下を試歩しをり道に張りつく花び
ら眺めて
道の辺に夫刈る草を寄せ行けば残されて咲く野菊
に会ひたり
コスモスが庭一面に咲きてをり父亡きあとの空家
を訪へば

文芸愛の小径

有理嘉子

亡き姉が農一筋に生き来しを詠みたる歌碑に残り
花舞ふ
文芸をこよなく愛せし兄在らば共に歩むや「文芸
愛の小径」を
文芸の愛の小径を登りゆく我と重ねる歌に会ひつ
つ

桜の花咲く頃

横山 美恵子

リハビリの友と行きみむ花見の宴行き先は秘密と待たるる木曜日

満開の桜の花びら風に舞ひ宴の器に華やかに浮く

期日前の投票に行く「バレンタイン」の桜の花びらのじゅうたんの道を

女の孫

宿野 和穂

女の孫が英語の原書を読みをれば「花子とアン」を思ひ出すなり

辞書持たず英語の原書を読む女孫慶応大学四年生なり

日常を英語で暮らす孫娘外国へだけは行かないで欲しい

光

豊田 絢子

茜空色あせはじめる山里に驚鳴き立ちて何処いづこに帰るや

ひと気なき池に射し込む木洩れ日に鯉泳ぎ来て揺らぐ光よ

立ち渡る清さやけき光に照り白む里の山々淑気満ちたり

自然に任せて

小林 洋子

出かけむと若きに誘はれ億劫なる己にむち打ち共に出かけつ

艶つやと雨季に勢ふ赤紫蘇われは憂しかり手力なきに

成るがまま為さぬがままにならぬには力不足と時を惜しまず

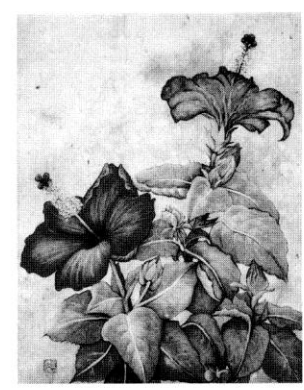
峡の夕どき

新免 三代

山の色濃く映しるる早苗田に入り日は光り水赤く染む

夕暮れの家路を鹿の走りしにお前も家路を急ぎしかやと

夕焼けの血の色の空暗みつつ山は漆黒に靈気迫り来



日本画 安東眞江

遠き日たぐる

加百 由起子

病床に聞えし「ふるさと」ええ歌と口遊みしよ有りし日の父

子と里へ行きし日は遠くその影を横に坐らせ姫新線の旅

境内に枯葉の舞へば子と競ひ両手に受けしよ遠き日たぐる

身の丈

新田 千晶

今日よりは若くなる日は皆無なり今日こそ我の一番若き日

歌詠めば明るきことが生れ来ぬ沈みさうなる我の裡にも

身の丈に合へるひと日を身の丈に合ふ一年を今年も過ぎさむ

ばあばの味

黒石初江

栗多き赤飯を蒸さむと早くよりいそいそ動くは親馬鹿なる我
街住みの子ども達にも送らむと味良き鯖鮓張り切りて巻く
孫達に残す物なき我故に舌に残さむばあばの味を

バリ島 (クタ)

末宗玲子

亡き姪が通ひ続けしバリ島のクタの海にて散骨をする
店員は床に寝そべり昼寝する平和なクタの商売風景
バリ島ではあちらで田植をこちらでは稲刈る田ありて秋冬春無し

生き永らへて

船曳文子

無器用に生き永らへて九十年新年を迎へ朝日を受ける
バターよりオリブオイルが良しと聞き試してみむか九十二歳の吾
プライドもはぢらひなども吹き飛ばし手拍子打ちつつ童謡歌ふも

卒寿をむかへて

加藤保子

除夜の鐘ききつつすすする年越そば二十五人の子孫そろひて
二十五回忌を終へて「ご苦労さん」と見下ろす五十路の夫の遺志よ
帰りゆく娘は曾孫の手をとりて「無理せぬように」と小さく言へり

朴の花

角利津

辿りゆく春木峠はつづら折れ道辺に濡るる苔の青さよ
純孝を見しやと朴の花にさへ問へども答へず雨に濡れをり
翠溪の歌碑を見下ろす朴の木よめぐる季節に花を咲かせて

問山はしたやまの「やせ御前ごぜ」

貞森房子

美作と勝央にかかる問山卯月八日の灌仏会今に氏子より甘茶の接待「やせ御前」とふ木仏背負ひて本堂三巡り
一步一步歩めば御詠歌ゆつたりと緑陰縫ふがに俗世離るる

さくら

角南三津糸

運命の不思議しみじみ思ひてはセピア色したアルバムを捲る
この杖とあと幾年やと仰ぐ空に「桜」は何故にセンチメンタル
裏道も近道も知り八十余年健やかに生き今桜満開

声の遅し

北村和子

産院より帰り来る曾孫を待ちてをり初対面なれば身繕ひをして
泣くもよし笑ふも嬉し嘆して欠伸もいとほし赤子と言ふは
両手足の動きもはげしく渾身にて泣く曾孫の声の遅し

阿部さんを偲んで

黒石 登代

夢だにも思はぬ阿部すみゑさん逝けり俄に迫る人の果無さ

亡き人は書に歌詠みに楽しみしと告げられふつと過れる笑顔

花満つる棺にそつと花を入れ空しさ過る斯うして終る

思ひ出ださむ

中川 富美枝

やはやはと朝の光を受けぬしに早も夕陽に緑の山並

挿し木して友より賜ひし紫陽花の花開きたり真白き大輪

労りてくれたる君のその言葉ふたび三たび思ひ出ださむ

花

長澤 和枝

広らなる刈田の岸に彼岸花の赤々と咲くわが農の村

こぼれ実のコスモス紅白桃色にけぶらふがごと夕暮るるなり

旬すぎし菊花を刈りしも良き花を供花としたるに明るむ仏間



ちぎり絵 小林 艶子

母

福島 美智子

大木の楠の枝は落とされて春の風吹く道が出来にけり

逃げ水にゆらめく夫の姿見ゆ草刈音は近くて遠し

紅梅のにはひ清けき春のゆふ亡き母たつがに木下にをりぬ

わが身のめぐり

入矢 敏江

うつほ草なども生ふるがままにして穩しき庭の雨を見てをり

枯枝でも箒でも追ひ払へずにしつしつと声にて追ひをり蛇を

逆光の暗がりの中に身構ふるまさしく獣いとしき犬も

初夏の庭

日下 智加枝

あをみどろの残れる水にすこややく太き腹してめだかが泳ぐ

巻きのぼる初雪葛の蔓に手を触れれば意外な硬さに動かぬ

幾日を咲きてむらさき濃き菖蒲はなびらちぢれて小さく終んぬ

約束したのに

浜田 くに子

声ヶ吶の葉桜色濃くなりをらむ花を見ようと約束したのに

神戸より来し戦友が父を撫で「あの世で会おう」と叫びて泣けり

時に一人で父の書齋に居りたかり聞き忘れたる数多思ひつつ

作東文化協会 グループ紹介

部 名	グループ名	種 別	代 表 者 名	指 導 者 名	例 会	場 所	展 示 会 等	作東文化協会会員		作東文化協会未加入者	合 計
								作東地区内	作東地区外		
書道部	1 白雲書道会	書道	北村福作	里見明	月2~3回	作東公民館	白雲書道会展(作東美術館)	14	13		27
	2 阿部書道会	書道	真野みよ子		月4回	川崎教室		4			4
	3 書春名	書道	春名直子	春名直子	月3回	1河本公民館 2土居西町 コミュニティ 3角南公会堂		7	1	1	9
	4 玲華書道教室	書道	末宗玲子	末宗玲子	月4回	講師自宅		5	2		7
絵画部	5 作東水彩画教室	水彩画	小林道幸	竹中信清	月1回	作東農村環境改善センター	春の絵画展、スケッチ展	8	3		11
	6 作東油彩画教室	油彩画	小林道幸	竹中信清	月2回	作東農村環境改善センター	春の絵画展、スケッチ展	7	4		11
	7 さつき会	日本画	寺師喜代美	井上美智江	月2回	教室 華(美作市江見)	日本画さつき会展(作東美術館)	7	6		13
	8 土居すみ絵	水墨画	小林艶子	岩本敏子	月2回	J A勝英土居支所		7	1		8
	9 彩の会	絵手紙	木南節子	-	年3回	集会所、個人の家等	吉野郵便局、大原保健センター、きんちやい館 作東老人保健施設等	3			3
	10 すみれ会	絵手紙	岩本敏子	岩本敏子	月1回	作東公民館		7	1		8
	11 こぶしの会	油彩画 水彩画	田中佳栄子	権田直良	月2回	JA作東支店大会議室	こぶしの会展(10月) みまさか風の会展(4月)	5	3		8
	12 吉野ひめっ子クラブ	絵手紙	小坂田千恵美	木南節子	年10回	殿河内コミュニティハウス	宝妙寺(節分祭、青葉祭)、吉野郵便局 吉野きんちやい館、ビューティーサロンシオン	12			12
園芸部	13 作東盆栽会	盆栽	青山巖	白鷺園主(姫路)	年2回	-	美作梅の会(地域交流会)	6	2		8
茶華道部	14 ひまわりの会	華道	中田敏子	中田敏甫	月2回	作東公民館		9			9
	15 茶の湯同好会	茶道	谷本津多江	谷本津多江	月2回	作東公民館	9月お月見茶会	7	1		8
文芸部	16 英北短歌会	短歌	横山猛	関内惇	月1回	作東中央公民館	プラザ展示(3月、10月)	15	9		24
	17 能登香短歌会	短歌	松井洋子	関内惇	月1回	粟井教育集会所	粟井村の行事	13			13
	18 吉野短歌会	短歌	新免三代	関内惇	月1回	吉野公民館	3月・10月に各1回プラザ展示	13	1		14
	19 山家川俳句会	俳句	春名貞和	春名はるを	月1回	福山地区福祉センター		15			15
	20 作東川柳同好会	川柳	原洋一	原洋一	月1回	作東総合支所第1会議室		15			15

作 東 文 化 協 会 グ ル ー プ 紹 介

部 名	グループ名	種 別	代 表 者 名	指 導 者 名	例 会	場 所	展 示 会 等	作東文化協会会員			合 計
								作東地区内	作東地区外	未加入者	
歴 史 部	21 歴史地名研究会	地名研究	新 田 祐 之	固定した指導者は、なし。地域の高齢者又は郷土史家	月1回	作東公民館他 地域の集会所		13人	5人	0人	18人
	22 古文書を読む会	古 文 書	真 野 みよ子	安 東 靖 雄	月1回	作東総合支所会議室		5	2		7
写 真 部	23 写真同好会 写友	写 真	小坂田 貢	小 玉 司	年2~3回	野外(撮影会)	バレンタインプラザ展示・佐用郡美術展展示	9	1		10
芸 能 部	24 吉野ハピネス	大 正 琴	小 林 美農里	富 永 仁 美	月2回	吉野公民館		10	5		15
	25 琴伝流大正琴あずさの会	大 正 琴	岩 本 敏 子	琴伝流大正琴全国普及会 中国本部 藤谷 守	月1回	J A勝英本店		4	5		9
	26 舞 の 会	剣 詩 舞 日 舞	石 川 八千代	早淵流 安原舞舟・菊水流 渡辺南征 若柳流 若柳吉品流・藤間流 藤間陽品	各々月4回	作東公民館 林野公民館		12	1		13
	27 作東吟詠愛好会	吟 詠	光 辻 猛 美	光 辻 猛 美	月2回	江見公民館、土居公民館 粟井集会所、吉野集会所		22			22
	28 コ ー ル 作 東	コーラス	山 本 文 子	池 田 直 美	月2回	作東公民館		20	2		22
	29 作東音楽同好会	カラオケ	島 民 子	土 屋 博 司	月8回	作東公民館	美作市文化連盟カラオケ発表会出場	6	13		19
	30 粟井カラオケ同好会	カラオケ	松 本 満寿子	松 本 満寿子	月2回	旧粟井小学校音楽教室		10			10
工 芸 部	31 江見ちぎり絵教室	ちぎり絵	末 宗 順 子	杉 本 幸 子	月1回	作東公民館		6	1		7
	32 福山ちぎり絵教室	ちぎり絵	岡 本 玲 子	杉 本 幸 子	月1回	福山多目的集会所	山の学校ロビーに展示	6			6
	33 む つ み 会	押 絵 ちぎり絵	山 本 津多江	-	月2回	原コミュニティ 白水コミュニティ		8			8
棋 道 部	34 双山囲碁クラブ	囲 碁	横 山 廣 志	横 山 廣 志	年3回	作東老人福祉センター		21		48	69
情 報 映 像 部	35 お達者ねっと倶楽部	インターネット	鳥 形 初 美	-	月2回	勝田支所パソコンルーム & 粟井小学校パソコン		7	2		9
手 芸 部	36 ビーズを楽しむ会	手 芸	妹 尾 さと子	西 坂 暁 子	月1回	作東公民館	作東公民館内で1日展示	9	3		12
	37 妹尾さと子編物・手芸教室	手 編 み	妹 尾 さと子	妹 尾 さと子 原 田 豊 子	月4回編物 月1回つまみ 細工	作東公民館	作東公民館内で月末に1日展示	18			18

365人 87人 49人 501人

平成26年度 作東文化協会事業報告

【全体事業】

年月日	事業名	内容
26 3 23	作東文化協会総会	作東バレンタインプラザ
4 11	第2回文化誌編集委員会 ※第1回目は昨年度実施	特別寄稿依頼者の決定・予算と印刷部数の確認・各記事担当者決定
4 25	第1回理事会	事業計画・文化誌編集委員会報告・研修旅行について
5 16	第3回文化誌編集委員会	沿革史・歴史年表について・原稿募集確認
5 23	第2回理事会	文化誌編集委員会報告・会員募集・研修旅行・専門グループ調査について
5 23	会員募集開始	会員募集
7 13	研修旅行	万田発酵・来島海峡・大山祇神社
8 5	第4回文化誌編集委員会	編集作業・文化誌配布方法について
9 17	第5回文化誌編集委員会	ゲラの確認・校正作業
10 3	第3回理事会	文化誌進捗状況の報告・秋の文化展について
10 18	秋の文化展	B & G 海洋センター(～19日)
27 1 23	第4回理事会	春の書画展・芸能発表会・総会について カラオケ連盟設立に伴うグループの設立(音楽同好会)について
3 6	第5回理事会	総会提出案件について
3 21	春の文化展	B & G 海洋センター・作東農村環境改善センター・作東バレンタインプラザ 芸能発表会・H27年度総会(～22日)

【支部活動】

部名	年月日	内容
江見・豊野支部	26 5 30	江見・豊野合同支部評議員会(会員募集等のチラシ配布のお願いと平成26年度の事業計画等協議)
	10 5	江見・豊野支部合同親睦旅行チラシ配布と文化誌配布(文化誌は全戸配布) ～8日
	10 31	江見・豊野支部合同親睦旅行(京都方面 32名参加)
土居支部	26 6 4	評議員会(会員募集外)
	10 6	評議員会(文化誌配布外)
福山支部	26 6	福山支部評議員会
栗井支部	26 6 3	第1回評議員会
	10 4	第2回評議員会
	10 25	研修旅行(淡路)
吉野支部	26	作東文化協会理事会4回出席・文化展総会出席
	6 16	評議員会(理事会の報告・事業計画・会員募集)
	10 4	評議員会(理事会の報告・文化誌配布依頼)
	10 18	評議員会(研修旅行・最終確認)
	11 4	視察研修旅行(宇治平等院)

【専門部活動・1】

部名	年月日	内容
書道部	26	白雲書道会/里見明宅(1教室月3回・2教室月2回)・作東公民館月2回・林野教室月2回・湯郷教室月2回 阿部書道会/川崎教室(毎月5回 日・祝) 書 春名/高本公民館・西町コミュニティ・角南公会堂(月・木・金の月3回) 玲華書道教室/自宅にて(毎月4回 木・金)
	9 5	白雲書道会/白雲書道会展(作東美術館常設展示)～7日
	10 18	白雲書道会・阿部書道会・書 春名・玲華書道教室/秋の文化展出品 ～19日
	27 3 21	白雲書道会・阿部書道会・書 春名・玲華書道教室/春の書画展出品 ～22日
	26	作東絵画教室/油彩画教室(月2回)・水彩画教室(月1回) さつき会/日本画(月2回) 彩の会/教室は集会所等にて不定期開催。展示は吉野郵便局・きんちやい館・大原保健センターにて不定期開催 絵手紙すみれ会/作東公民館(月1回) こぶしの会/油彩・水彩(月2回) 絵手紙ひめっ子クラブ/絵手紙教室殿内コミュニティハウス(年10回最終土曜日)
	4	土居すみ絵/作品展示(作東バレンタインプラザ)
絵画部	4	こぶしの会/みまさか風の会出品(津山市)
	4	作東絵画教室/光風会展出品
	5 3	作東絵画教室/春の絵画展(作東美術館常設展示室) ～6日
	5	こぶしの会/県北展出品 写生会2回
	7	さつき会/倉敷市立美術館 院展 鑑賞による研修
	9	こぶしの会/こぶしの会 グループ展
	9	作東絵画教室/県展出品
	10	さつき会/もんじゃ展 鑑賞による研修
	10 18	作東絵画教室・さつき会・土居すみ絵・彩の会・こぶしの会/作東文化協会秋の文化展出品 ～19日
	10	作東絵画教室/しんわ美術展出品・勝山いいとこみつけた展出品
	10	こぶしの会/愛の美術展出品 写生会2回
	27 2 7	作東絵画教室/湯郷を描く展覧会出品(湯郷地域交流センター) ～13日
	2 19	さつき会/さつき会日本画展(作東美術館) ～22日
	2	絵手紙ひめっ子クラブ/宝妙寺節分祭作品展示見学会
3 21	作東絵画教室・さつき会・土居すみ絵・彩の会・こぶしの会/作東文化協会春の書画展出品 ～22日	
3 27	さつき会/玄美会展 鑑賞による研修(勝央美術文学館) ～30日	
3	絵手紙ひめっ子クラブ/大原ひな祭り絵手紙見学会	
園芸部	26 4	盆栽/春 技術講習会(講師:白鷺園主指導)美作文化センター 盆栽/秋 技術講習会(講師:白鷺園主指導) 盆栽/秋 盆栽鑑賞会(京都市文化会館)
	26	ひまわりの会/定例会(月2回・作東公民館) 秋・春文化展出品 茶の湯同好会/定例会(月4回・作東公民館)
	26	英北短歌会/定例会(作歌・作品鑑賞・文法の学習 毎月第2木曜日・年12回) 能登香短歌会/定例詠草会 月1回開催 吉野短歌会/定例詠草会 月1回第1水曜日実施 山家川俳句会/各月の最終土曜日・定例会 作東川柳同好会/偶数月例会・新聞発表
文芸部	4 10	第3回文芸愛の小径短歌大会(美作市全体)
	10	英北短歌会・能登香短歌会・吉野短歌会 作品展示(バレンタインプラザ)

【専門部活動・2】

部名	年	月	日	内 容	
文芸部	27	3		英北短歌会・能登香短歌会・吉野短歌会 作品展示(バレンタインプラザ)	
歴史部	26			歴史地名研究会/月1回 第4火曜日実施	
				古文書を読む会/毎月1回実施(第3金曜日 作東総合支所会議室にて)	
写真部	26	8		バレンタインプラザ展示	
		11		佐用郡美術展出品	
芸能部	26			吉野ハピネス(岡田香真流大正琴)/月2~3回	
				J Aあずさの会(琴伝流大正琴)/月2~3回	
				早瀬流剣詩舞道/月3回	
				菊水流剣詩舞道/月2~3回	
				若柳流日本舞踊/月2~3回	
				藤間流日本舞踊/月2~3回	
				各流派 年1~2回 作東舞の会参画・美作市連盟参画・美作市吟剣詩舞参画	
				菊水流・早瀬流 全国コンクール大会参画	
				作東吟詠愛好会(詩吟)/月2~3回	
				コール作東(コーラス)/月2~3回	
				作東音楽同好会(カラオケ)/月8回(作東公民館にて)	
		4	19		第1回芸能部役員会
		12	3		第2回芸能部役員会
		27	1 30		第3回芸能部役員会
			3 21		第8回作東文化協会作品展 ~22日・第10回芸能発表会 22日のみ
	工芸部	26			江見ちぎり絵教室/年10回開催(福山ちぎり絵教室との合同1回分を含む)
					福山ちぎり絵教室/年11回開催(江見ちぎり絵教室との合同1回分を含む)
				がんびの会/年6回実施(粟井教育集会所)	
				むつみ会(押絵・ちぎり絵)/月2回開催	
		9	1		がんびの会/敬老会にて展示(粟井小学校)
		10	18		江見ちぎり絵教室/秋の文化展出品 ~19日
	11			江見ちぎり絵教室/研修(和紙の本社 がんび舎)	
	27	3 21		江見ちぎり絵教室/春の文化展出品 ~22日	
棋道部				子ども囲碁教室(美作市民センター・大原公民館) 毎月3回	
	26	4 24		第123回双山囲碁大会 参加者:32名	
		8 24		第124回双山囲碁大会 参加者:44名	
	27	1 25		第125回双山囲碁大会 参加者:39名	
情報映像部	26			作東文化協会ホームページ更新 随時	
	4	1		インターネット講座(勝田支所パソコンルーム) 4月1日以降毎月第1火曜日	
	4	15		パソコン講座(粟井地区センター) 4月15日以降毎月第3火曜日	

【連盟事業】

年	月	日	事業名	会 場
26	6	15	第7回美作市文化連盟芸能発表会	美作文化センター
	6	21	美作市文化連盟主催第14回美作市囲碁大会	作東農村環境改善センター大研修室
	7	4	第7回美作市文化連盟芸能発表会実行委員会	作東総合支所会議室
	11	9	第8回美作市吟剣詩舞道大会	英田公民館
	11	15	美作市文化連盟主催第15回美作市囲碁大会	作東農村環境改善センター大研修室
27	1	25	美作市文化連盟洋画部作品展	作東美術館(1月31日まで開催)
	2	12	第8回美作市文化連盟芸能発表会実行委員会	作東総合支所会議室

編集後記

文化誌に毎号特別寄稿をいただいております元会長の里見明氏が体調不良による入院のため、寄稿いただけなくなり、替わりに元会長の横山猛氏と、引き続き上福原出身（岡山市在住）の岡田千茶氏より玉稿をいただき、今号も二名の特別寄稿となりました。

また、里見先生の一日も早いご快復を祈念して、表紙写真に先生の書を掲載させていただきました。

随筆・随想等文章作品も十一品の投稿や、短文芸には七十五名の方々の投稿句・歌と、挿入写真も各部のご協力により十八点も挿入し、今号も充実した文化誌を刊行することができましたことを会員皆様のご協力のたまものと、厚くお礼申し上げます。

なお、編集期間中に、作東文化協会の生みの親的存在の阿部正登（雲魚）氏の訃報に接し、紙上を借りて心よりお悔やみ申し上げます。

編集委員会

作 東 の 文 化

第 41 号

平成27年10月1日発行

編 集 作東文化協会文化誌編集委員会
(美作市教育委員会 社会教育課)

編集委員 新田 祐之 梅澤 紀之 小林 秀雄
谷口 重人 原 洋一 真野みよ子
内藤 善晴 春名 貞和 妹尾美智子

発行所 作 東 文 化 協 会
岡山県美作市教育委員会 社会教育課
TEL (0868) 72-2900 〒709-4292
HPアドレス <http://bunka.boj.jp/>

印刷所 株式会社 廣 陽 本 社
岡山県津山市田町22



阿部雲魚先生を偲んで…